

松江のハーン(二)

——『盆踊り』と『神々の国の首都』——

牧 野 陽 子

一 山越えの旅

●新たな土地、神々の国へ

ハーンが東京を離れ、新任の地、島根県松江へと向かったのは明治二十三年八月下旬のことだった。晩夏の日差しが照りつけるなか、汽車に乗り込み、東京の賑やかな町並みをハーンは後にした。真鍋晃も同行する。日本語がまだおぼつかないハーンのため、通訳が必要だったのである。

東京から姫路までが汽車、姫路からは人力車を雇って中国山脈を越えるという旅程であった。東海道線はようやく二十二年に神戸まで、二十三年に姫路まで全通したばかりで、一日一往復の便、片道約二十数時間を要した。静岡近く、車窓から富士山の巨大な全貌をまのあたりにしたときのハーンは、喜びと共に身のひきしまる緊張感を覚えただろう。まもなく日本に上陸しようという時、海のかなた、朝日に輝く神々しい姿を船上からみて

松江のハーン(二)

松江のハーン(二)

感動したのは、ほんの数カ月前のことだった。その富士を今、同じ大地の上でまじかに見上げている。いよいよ自分はこの日本という国の、国民の懐深く入ろうとしている、その心を自分の手でつかみ、作品に書いていくのだ、そうハーンは自負と期待をこめて思った。約十年後、実際に登山をしたときには、また別種のやや複雑な感慨を抱くことになるのだが、このときのハーンには、まだ考えもよらぬことだった。

当時の旅は今と比べ物にならぬほど、時間も体力も要した。ゴトゴトと揺れる汽車の動きに身をゆだね、緩やかに流れていく海、山、田園の風景の変化をながめながら、人は精神的により密度の高い、濃厚な旅の体験をした。ハーンも東京から松江へと、日本を縦断して、日本を見る目が変わった。日本の風物を一枚岩のように、十九世紀ヨーロッパのエキゾチスムの尺度で眺め、エキゾチスムの語法で語っていたのが、山陰の神々の国という日本の古層に触れることによって、いわば日本に対する認識が重層化し、深まっていくのである。約二十年後に夏目漱石が書いた『三四郎』で、九州から上京する三四郎の汽車の旅は、当時の青年の大方にとってそうだったように、故郷の温かで単純な小世界から近代化途上の日本という大人の複雑な世界へと精神的異動の象徴として描かれているのだが、ハーンの場合、地理的な方向も精神的な影響も全く逆ながら、やはり対象に対する認識の複層化という点では変わりない。

ハーンという人は、五十四年の生涯の間に、実に多くの土地を転々と移り住んだ人である。ギリシャでの出生から始まって、アイルランド、ウエルズ、フランス、ロンドン、アメリカ、西インド諸島、そして日本。アメリカ国内でも、ニューヨーク、シンシナティ、ニューオーリーonzと動き、来日以後も、横浜から松江、熊本、神戸、東京へと移っていった。そして、ハーンが際立っているのは、新しい土地へと移動するたびに、必ず自ら

のキャリアに新たな深まりを加え、新境地を切り開いていることである。その移転が自分の意図したものではなく、また自分の意志で選んだ土地ではなかった時でも、また前後の事情からして現状逃避の色合いが濃厚な場合でも、後になってみれば、いつも必ず大きな飛躍のきっかけとなり、ハーンの運命を展開させているのだった。土地運がいいとでもいうのだろうか。いわば、その土地その土地の精気を本能的に体内にとりこんで自分の肥やしにしていくような力があるタイプの人間だったといえる。そのように、ハーンの人生において転機となった幾多の旅のなかでも、今回の松江行きはとりわけ最大の重要性をもつことになる。

●つづら折りの山道

ハーンは後にチェンバレンに宛てた手紙のなかで、「この旅行は私のすべての旅行経験のうちで、いくつかの点でもっとも愉快的な旅でした。景色が私に特殊な効果を及ぼしたのです……」⁽¹⁾と述べている。

ハーンはそういった自分の心理的移行の様を、姫路から日本海側への中国山脈の山越えの描写に託して後に描いた。ハーンの日本に関する初めての著作、『知られぬ日本の面影』（一八九四年）上下二巻のうち全体の約三分の一は横浜周辺の見聞録である。残り三分の二が出雲を舞台とするのだが、そのかわきりが「盆踊り」というよく知られた一章である。松江へ赴く途中、鳥取県西伯郡逢坂村上市（現在の中山町上市）で盆踊りを見物した印象的な体験をのべた短編である。ハーンは次のように書き出す。

神代そのままの国、古い神々の国、出雲へ行くには、幾つも山をこえなくてはならない。太平洋岸から日本

松江のハーン(三)

海岸へと、強力の俵夫をとつかえひっかえ、俵で四日の旅である。いちばん距離が長くて、いちばん人が通らない道を選んだからである。⁽²⁾(仙北谷晃一訳、以下同じ)

ハーンが実際にどの経路を通ったかは不明である。当時いわゆる出雲街道と呼ばれたのは、今の姫路線にそって姫路から津山―勝山まで行き、四十曲峠を越えて米子へ出るものだった。これは昔、参勤交代にも使われ、人通りの多い便利なコースであった。しかし、ハーンは「いちばん距離が長くて、いちばん人が通らない道を選んだ」と述べており、またこのルートでは、盆踊りを見た上市は通らないため、ハーンがこの一般的な行き方を避けて、おそらく津山から人形峠、または勝山から犬狹峠をへて倉吉で山陰街道に出たか、でなければ、平福から駒返り峠(志戸坂峠)をへて鳥取で山陰街道に出て、その後日本海沿いに西進して米子に到着しただろうとされている。

だが旅のルートの詮索はさておき、いまやはり目をひくのは、その旅路のハーンの描写のしかたなのである。先の引用文はこう続く。

この長い道は、大部分が谷間を縫うように続いている。谷はさらに高い谷へと開け、それにつれて道ものぼり、山と山とに挟まれた稲田の谷は、畦をめぐらした台地の段々につれて上へ上へと続き、巨大な緑の階段でも見るようである。その上には松や杉の薄暗い森が影を作り、この樹木におおわれた山々の頂きの上には、さらに遠い連山の藍色が浮かび出て、そのまた上にぼうと灰色に霞んだ山脈のシルエットが重なっている。大気

は生暖かく、風がない⁽³⁾。

幾重にも曲折する山道を登りながら、一段一段と高さを増していく。ちょうど緑の屏風の間をたどっていくように、たった今来た道はもう山の影に隠れて見えない。そうやって次第に山脈の奥深く入りこんでいくこの描写は、ただ単に忠実な旅の記録だけともいえない。次々と風景が展開し、自分のたどってきた道筋がわからなくなる「つづら折りの道」とは、方向感覚を失わせる一種の迷路であり、新世界ないしは異世界へ行くときの古今東西共通の文学的符号だからである。その代表的なものが桃源郷伝説だが、ほかにも日本でいえば泉鏡花の作品から最近のSFファンタジー作品まで、いくらでも例はあげられよう。「大気が生暖かく、風がない」というのも、そこではあたかも時が停止し、現実のエアポケットに入ったような感覚を与える。ハーンはこうして読者にも、これから神々の国に入っていくことを予感させるのである。

周辺の様子の変化もハーンは紀行作家らしい的確な目で観察している。

最初は仏教が優勢だった。山頂には必ず寺が、ときには村のつましさに似合わぬほど立派な寺があり、仏陀や菩薩の像が里程碑のように正確に距離を刻みながら路傍に立っている。しかし日をへて、山高い西の奥地へと道が進むにつれて、寺の数は少なくなり、たまにあっては貧弱で小さい。路傍の石像もめったに見られない。そのかわりに、お宮と鳥居が大きく立派になってきて、神道の象徴が目につくようになる。

方言が著しく、同行の真鍋晃にも言葉がわからなくなる。家の造りもこれまでの田舎家とは違う。農民の顔色もずっと黒い。かぶっている笠も風変わりだ。

松江のハーソン(三)

一方でハーソンは、何となく懐かしい思いにかられる。「私は再び西インド諸島にあって、ドミニカ島やマルティニック島の丘の、つづら折りの道を登っているのではないか、ふとそんな思いに誘われることが時折だった。実際私は、光り輝く地平のかたに、棕櫚やパンヤの樹影をいつしか探し求めているのだ⁽⁴⁾」。緑濃い中国山脈の山々の景色が数年前の熱帯の旅に重なっていた。

大きな山を巻くようにして続いていた道が、突然下りになったと思ったら、やがて、高く尖った藁葺屋根と青苔の生えた軒の見える谷間が開けてきた。——古い広重の画集の中でも出て来そうな村だった。村落全体の色調が風景の色調にじっくりと和している。これが伯耆の国、上市だ⁽⁵⁾った。

迷路のような山道が終わると、突然視界が開け、そこに広大な別世界がみえる。これもまた、桃源郷に代表される異世界出現の伝統的方法である。

俣は、静かで古ぼけた、小さな宿屋の前で停まる。迎えに出た主は、たいそうな老人だった。無口でおとなしい村人たちが——大抵は女と子供ばかりだが——異人見物とばかり俣のまわりに集まってきて、いかにも感心した風をしたり、なかには服に触ってみようとするものもある。もっとも、好奇心の底におどおどした微笑が消えることはない。⁽⁶⁾

ハーンはその宿に泊まることにした。すると古ぼけた外觀に比べ、家の中が実に気持ちよく清潔に整えられていることに感心する。磨き込んだ階段や縁側はよれ目一つなく、鏡のように女中の素足を映していた。調度品は、みな優雅で繊細、人々の親切さと礼儀正しきは「想像に絶し、言語に絶し、他の国ではありえないこと」⁽¹⁾だと述べる。

●農村を見る目

ハーンが日本の庶民の姿を描く時、実に暖かい目で観察し、好意的に書き記したことはよく知られている。ハーンのその特徴は、この松江赴任を機に強まっていったものである。ハーンとよく比較されるビエル・ロティが日本の風俗をとりあげる時の冷ややかで皮肉っぽい眼差しはハーンには全くない。ロティに比べると、イザベラ・バードの『日本奥地紀行』(一八八〇年)の記述は一見客観的だが、英国の牧師の娘に生まれたイザベラが、一八七八年の東北旅行中いちばん堪えがたかった事として繰返し挙げたのは、外国人である彼女に対して向けられた不躰な好奇の眼だった。⁽⁸⁾だがそれも、ハーンには一向に苦にならないどころか、かえって人々の穏やかさと素朴さをあらわしているように受け止めたのだった。上市に来る前の街道沿いの出来事としてもハーンは述べている。「田舎の人たちは、外人の私に驚異の目を見張る。色々な場所で、私が休んでいると、老人がやって来て、私の着ているものに触ろうとする。何度も腰をかめてお辞儀をし、人なつっこい笑みを浮かべて、そのどうにも抑えがたい好奇の念を詫び、通訳に様々なおかしい質問を発するのである。これほどに温和で親切な顔を私はいまだかつて見たことがない。そしてこれらの顔はそのまま彼らの魂を表している。私はまだ怒った声を聞

いたこともなければ、不親切な行為を目にしたこともない。⁽⁹⁾」

農民の裸に近い姿についてもイザベラは、大人は虫刺されの炎症で、子供は皮膚病で身体中がただれて汚らしいと眉をひそめるが、ハーンは、幅狭の白い腰布を一枚まとっただけの裸姿は健康で清潔、特に子供たちの裸はかわいらしいと言う。イザベラがその同じ極貧の農村で、鶏は犬や馬が焚火の煙ですすけた小屋に人間と一緒に住むのを見ると、「自分がこれまでに見てきたどの野蛮人と比べても見劣りがする⁽¹⁰⁾」と述べる。だが、ハーンは、山道沿いに素朴な馬頭観音像をみつけ、その前に野の花と線香立てと米粒が供えてあるのをみて、「言語に絶するほど貧しい」百姓たちが、「自分たちに仕える物言わぬ生き物たちが、疫病にかからぬよう祈るばかりでなく、死後、彼らの魂がいっそう幸福な境遇に入るようにと祈る」のだと驚き、そして「私はほんと嬉しい気持ちにさせられた。自分たちの使役した牛や馬の霊魂のために祈るほど、心優しい国民なら、親切でなからうはずはないからだ⁽¹¹⁾」と思うのだった。

●心の理想郷

ハーンに、イザベラのように日本の農民を「野蛮な原住民」と見下ろす当時の西洋人にはむしろ普通というべき偏見がなかったことは確かである。だからこそ、後に『こころ』所収の幾多の短編などにみられるような、日本の庶民の心理と行動のあやを見事な文学作品に表現し結晶させることが出来た。だが、出雲を舞台とする連作スケッチの第一番目のこの「盆踊り」が、読者にそれとわかるような桃源郷文学の伝統的手法で書かれていると

いうこともまた、わきまえておくべきだろう。出雲の地はハーンにとって何よりも、一種の幻想的な心の異郷と映ったのだった。上市に到着したハーンを出迎えるのが老人と女と子供ばかりというのも象徴的である。現実社会の代表たる成人男子の姿はそぐわないと思ってハーンは描写から落としたにちがいない。そしてさらに、この古風な地方ではまだ旧暦を用いていたという点も、当時としてはめずらしくないことだが、いかにも文明から隔絶した感があって、大いにハーンの氣にいったはずだ。

●夢幻の世界の踊り

ハーンの泊まった八月二十八日はたまたま旧暦七月十三日にあたり、上市の隣の集落、下市の妙元寺で盆踊りがあった。夕食をとりながら、「お盆の間は魚をお出しできません」、とお内儀さんが説明するのを聞いていると、どこか遠くの方から聞き慣れぬ音が聞こえてくる。手拍子の音だった。熱帯地方で見た踊りを思いだが、それに比べるとずいぶん静かでゆったりとした手拍子だとハーンは思う。そしてその上をもっとゆったりとしたリズムを刻んで、鈍く低い音——お寺の太太鼓を打つ音が響いてくる。晃とともに浴衣がけのまま急いで外に飛び出していくと、踊りを見ようと同じ方向に三々五々向かう人々の下駄の音が町中にカラコロとこだまする。踊りの手拍子と太太鼓と下駄の音という三種類の音を重ねていくことで、日本人なら誰でも懐かしく思い出す夏の宵の情緒を巧みに描くあたりは実に心憎い。

盆踊りは古い寺の境内で行われた。大きな白い月がこうこうとさしていた。「静かで、明るくて、ヨーロッパの夜よりも広大な印象」の、ことのほか美しい夜であった。そして太鼓がひとつどんと鳴ったのを合図にそこで繰

り広げられた幻想的な踊りにハーンは呪縛されたかのように心奪われてしまう。

建物の影の中から月明かりのなかに進みでてきた踊りの行列はみな「小鳥のように軽やかに身の平行をとっている」若い娘ばかりだったが、その姿は「古代の壺の面に描かれた夢のような人々の姿」に通うものであった。そして「膝のあたりにびったりとまといつく美しい日本の着物」は、大きく垂れた袖と妙に幅広の帯さえなければ、「ギリシヤかエトルリアの画家の描いた壺絵」の衣装に似ているとハーンは思った。ハーンは山陰の田舎の踊りの光景に古代ギリシヤのイメージを重ねているわけで、ハーンは今後、松江市内の情景や出雲大社の宮司の姿など、度々同じような比喻をする。そして、そのような形容のために、この盆踊りの描写が日本人にとっても一種エキゾチックな風を帯びてみえる。時も空間も隔てた古代地中海世界につながることで、一気に地平線が開けるような広々とした普遍性が生じるのである。

だが、今の日本で知られている様々な盆踊りと比べていかにも不思議な踊りの感を強めるのは、踊りのテンポの緩やかさと音楽のない静けさだろう。

いっせいに右足を一步前に踏み出すのだが、足の動きは滑るがごとくで草履が地面から離れることがない。同時に両手が右へのびて、ふわっと浮いたような手振りになり、笑みをたたえた顔が、お辞儀でもするように俯向く。出した右足が後へ引かれ、もう一度波打つような手振りと神秘的なお辞儀とが繰り返される。……(中略)……。ゆったりと進む踊りの列は、いつの間にか、月光に照らされた境内一杯に広がる大きな輪になって、声もなく眺め入る人々のまわりをめぐるのである。

そして絶えず白い手がいつせいに、しなしなと揺れ動く。……そのしぐさは、何か呪文でも紡ぎ出すかのようである。妖精のような袖がいつせいに羽ばたいて、本物の翼のような淡い影を作る。足が複雑な踊りのリズムに乗って、いつせいに平衡を保って進む。眺めている中に思わず眠気を誘われてしまう——丁度、ちらちら光りながら流れて行く水に見入っている時のように。

この眠気をいっそう強めるのは、物音ひとつしもないあたりの静けさである。誰一人口をきくものがない。見物人でさえ黙している。かなり間遠な手拍子の合間合間に、藪にすだく虫の音と、軽く土埃をあげる、しゅうしゅうという草履の音が入るだけである。⁽¹³⁾

単調な動きの催眠的な繰り返し、無重力空間に浮遊するような緩やかな調子、そして時を止めたかのような無音の支配。まるで夢か記憶のなかにみるスローモーションの映像を思わせる描写である。

踊りの輪の背後には古い墓地が広がって、白い提灯が妖しく揺らめいている。そしてハーンは、今自分が見ているのは、遠い遠い太古のものだ、薄明の神代の時代に属するものなのだと考える。

盆踊りは無言の中に続けられていったが、突然一人の娘の口から一ふしの歌がほとぼしりでた。と思うと再び無言の動きに戻り、ややあって今度は男の朗々とした歌声が響く。そして歌に次ぐ歌のなか、ハーンが時を忘れて見入っていると、十二時を告げる寺の鐘が突如として響きわたった。その途端、あたかもおとぎ話の魔法が解けたがごとく踊りの輪が崩れ、人々はうってかわって賑やかに解散する。その晩、ハーンは異様な感動に包まれたまま眠れなかった。

松江のハーン(二)

翌年の夏、ハーンは新婚の妻小泉節子を伴って松江から再び下市を訪れて、同じ宿屋に泊まる。だが盆踊りが警察の意向で中止になったと知ってひどく失望した。実際は付近一帯に伝染病のコレラが流行したための、一年だけの中止だったのだが、ハーンは勘違いして、「駄目です。日本の古い、面白い習慣をこわします。皆ヤソのためです。日本の物こわして西洋の真似するばかりです」⁽¹⁴⁾と憤慨している。そしてすぐさま節子とともに、いたるところ盆踊りを探して歩く。ハーンはそれ以後も機会あるごとに各地の盆踊りを見物した。そしてそれぞれの地方色に興味を覚えて、伯耆の境港の漁師たちの盆踊りが元気の溢れた勇ましい踊りならば、杵築のは陽気な豊年踊りだと言いい、だが、下市のような精霊を慰める踊りはどこにもなかったと後に述べている⁽¹⁴⁾。

下市のこの盆踊りは確かに当時としても珍しい種類のものだったのだろう。だがハーンにとって初めて見た、しかも神々の国たる出雲へ赴く途中にみた盆踊りだったということも、その幻想性を際立たせ、その感動を大きくした要因だった。つづら折りの山道をへて迷い込んだ異境で見た、それは夢幻の世界の踊りだったのである。ハーン感動は、現実の出雲の田舎というよりは、連綿と続いている古代の神々の世界がそこに重なるのを見た感動だったともいえよう。

●時間を逆行する旅

この異境が一種の桃源郷、アルカディアとして受け止められているのは、見てきたとおりである。だが単なるエキゾチックな異国のヴィジョンとしての桃源郷ならば、出雲へくる以前もハーンは熱帯の楽園等に投影していたし、何よりも、東洋の国に対する当時のありふれた褒め言葉であって、紀行文などによく使われる通俗的な形

容法であった。たとえば、アメリカ時代のハーンの女性同僚記者エリザベス・ビスランドも世界一周旅行の途中、日本に二日間滞在して芝の東照宮を見た時の印象を、「我もまたアルカディアにありき」と感嘆している。

だが出雲という異郷がハーンにとって特に深い意味をもったのは、それが古代ギリシャの幻影と重なったということだった。すでにチェンバレン訳の『古事記』を読んで神話の国という先入イメージがあったものの、古代の息吹がいまなお生きている風景と人々の生活を自分の目で確認し、かつ自分自身にとっていかなる意味があるのかに気付いたのが、この陰陽越えの旅であり、盆踊りの体験だったのである。ハーンはつづら折りの山道を登りながら、西インド諸島の旅を連想したと『盆踊り』の作品中にもいっているが、また同時に、もっと古い記憶の景色をも想起している。先述のチェンバレン宛の手紙は、こう続く。

景色が私にこんな特殊な効果を及ぼしたのです。つまり、道中の景色は——ここに似た火山性地形の国で受けた——あの私の熱帯の印象を数多く私に繰り返し味わわせてくれ、私がすでに忘れてしまっていた、ウェールズやイングランドの旅のありとあらゆる昔の思い出をまのあたりに蘇らせてくれたのです。熱帯地方の情感と北方の国々の夏の情感がこのように混ざり合ってできる心象は、これは譬えようもなく美しいものでした。

ハーンは出雲の国へと山道をたどりながら、数年前の西インド諸島の旅を思い出し、ついで少年時代のウェールズやイングランドの旅を思い出して、そして上市の盆踊りにハーンが幼年時代を過ごした幻の母の国ギリシャの面影をみいだす。すでに四十歳になっていたハーンにとってこの旅はいわば、人生の時間を遡行する旅の始ま

松江のハーン(二)

りに他ならなかった。ハーンはずっとイギリスやアイルランドですごした子供時代にこだわりをもちつづけ、あまり語りたがらなかった人だけに、この手紙での言及の素直さには少々驚きを禁じえない。それだけこの手紙を書いた時点、つまり松江での生活も軌道に乗ったころのハーンの気持ちをよく表しているといえる。ハーンは出雲に来て、はじめてそれまでの風潮としての熱帯志向、エキゾチスム志向を脱却することになる。空間の旅が内面的な時間の旅に重なることで、ハーンの紀行文におけるそれまでの、世界旅行の流行と軌を一にした未開地の風光風習に対する関心がより深みと人間味を帯びるようになる。そしてハーンの桃源郷像はここでより切実なる内面性をもった。中国山脈山越えの旅、そして盆踊りの体験は、神々の国に入る一種の通過儀礼、イニシエーションだったのである。

八月三十日、ハーンは真鍋晃とともに米子で小さな汽船に乗って中海を渡り、大橋川の水道に入って栈橋で上陸、人力車にのりかえて午後四時、松江の富田屋旅館に到着する。

二 神々の国の首都

●富田屋旅館

富田屋に到着したハーンを、女将のツネとその夫太平、年若い女中の池田ノブらが恭しく出迎えた。先にハーンとの間で契約の交渉にあたった県の事務官、毛利八弥の姿もあった。これから教壇にたつ島根県尋常中学校の若き教頭西田千太郎もさっそく挨拶に来た。彼らは実に丁寧にハーンに接した。ハーンは松江で、これまでの人

生で初めて社会的な地位と世間の尊敬を享受することになるのである。

ハーンが二階の八畳と二畳の続き部屋に通されると、そこには県が用意した西洋式の机と椅子がすでに運びこんであつた。この日のことを、地元の『松江日報』（九月十四日）はさつそく次のように報じる。

お雇い教師ヘルン氏。本邦に在留せる西洋人はとかく自国の風を固守し我邦の事物を目して野蛮なり未開なりと惡しざまに批評する癖あれども、こんど本県に雇入れられたるお雇い教師ヘルン氏は感心にも全くこれに反して日本の風俗人情を賞賛すること仕切りにして其身も常に日本の衣服を着して日本の食物を食し只管日本に僻するが如き風あり。……（後略）……⁽¹⁵⁾

この記事によると、ハーン到着の報を聞いて或る人が直ちに宿屋に挨拶にいった。その時、和服のままでは礼を失するかと思ひ、わざわざいったん帰宅して洋服に着替えて行つた。ところが出てきたハーンは浴衣一枚の姿で、自分は座布団の上にくつろいですわり、日本人のほうを、「洋服のままで正座は窮屈でしょう」と言つて椅子を勧めて腰かけさせたらしい。それでまるで取調べでもしているような珍妙な図になつてしまつた。この人物が県の役人なのか、それとも西田なのかは定かではないが、「その案外なるにあきれ、しからば態々洋服に着替へざりしものと後悔したり」と苦笑しつつも、この初対面の一件で両者がぐつと打ち解けたことは確からしく、雑談もはずんだ。「ここは山陰の奥の僻地で西洋人の出入りもなく何かと不便でしょう」と言つと、ハーンはそれは逆で、西洋人が常に往来して人々がすでに西洋風を見習っている地方は好きではない、古来の風俗習慣をそのまま

松江のハーン(三)

保存する地方にこそ滞留したいのだ、それに食事も西洋食でなくて結構、今日も鮎に卵数個、二三合の酒をたべた、と答えたといふ。⁽¹⁵⁾

ハーンが日本の文化に並々ならぬ関心を抱いており、しかも西洋至上主義者ではないらしいことが、こうして島根県側になかば驚きの混じった大いなる好感をもって受け止められたのが記事の文面からもうかがわれる。保守的な気風の松江でハーンは、日本を理解してくれる異国のまればととして大事にされていくのだった。

●穴道湖の夕日と朝靄

松江は明治二十二年の全国市制施行に伴い「松江市」となったばかりで、当時約一万戸の世帯に三万五千人が住んでいた。町は湖岸に沿うて半月型に湾曲していて、市街地の中心にある商人の区域、南東部のほとんど寺ばかりで占められている区域、そして武家屋敷の並ぶ土族の区域の三つに分かれていた。武家屋敷に取り囲まれたお城山の頂きには、巨大な石を積み重ねた土台から鉄灰色の城郭が何百年も前に初めて建てられた時の姿のまま空にそびえていた。師範学校、中学校、県庁と郵便局など新しい洋風の建物もあったが、それ以外は昔そのままの古風で趣のある町並みだった。

松江という町の景観を特徴付けるのは、何といっても穴道湖の存在である。富田屋はちょうど大橋川の北岸に面しているから、宿からは、南の方に穴道湖が広がり、その向こうには中国山脈が霞んで見えた。東には「出雲富士」の大山の霊峰も望むことができた。このような眺めの素晴らしさがまずハーンの氣にいった。

ハーンは、後に「神々の国の首都」の中で、穴道湖の日の出と落日の光景を一幅の印象派の絵画のように美し

い雅文で描いている。刻一刻と変幻していく夕空、遠景に霞む山並と湖上の風光を、青・灰・藍・紫・朱・金・緑そのほかの色の単語を並べて実に繊細に多彩華麗に捉えた。ハーンの文章によって、宍道湖の夕景色は一躍有名になり、瀬戸内海の夕日、有明海の夕日と並んで俗に「日本の三大夕日」と讃えられるようになったという。海や湖、川辺の日の出や日没の景色はモネなどの連作をあげるまでもなく、印象派の画家たちがもっとも好んで絵画に描いた主題だが、ハーンも終生夕日を眺めるのを愛した。流れゆく時間の推移の一瞬一瞬を、いわば時そのものを切り取って、絵に、文章に、描き留める。それがこの主題の魅力なのだろう。

ハーンはアメリカ時代に、カリブ海や西インド諸島の熱帯の海に沈む壮絶な夕日を華やかに描いていたから、宍道湖の日没の光景をみながらも、おのづから熱帯と日本を重ね、比較していた。そして、「日本には熱帯地方のような落日はない。光は夢のなかに差す光のように穏やかで、あのどぎついほどの色彩はない。……海を見ても空をみても、……霞のような淡い色合いである⁽¹⁶⁾」と思った。

日本では夕日さえも淡く霞がかっている大気の湿潤さに心をとめたハーンは、だから、霧に包まれた暁の光景には一層強く感じ入ることになる。

ハーンは毎朝、目覚めるとまず障子を開け放ち、大橋川、宍道湖、遙かな山並みを望む夜明けの風景を眺め渡したという。

眠りそのもののような狭霧のなかに浸っていた暁闇の……色彩が、今、さやかな朝霧のなかに静かにとけこんでゆく、この眺めの美しさ！……この霧のために、湖水は、実際よりはるかに大きく見え、湖ではなくて、夜明けの空と、それと同じ色の水とが渾然と混じりあった、美しい幻の海のように見える。その霧の中から、

松江のハーン(二)

嶺々の頂きが島のように浮かび上がり、……淡い朝靄が、静かに立ち昇るにつれて、しばしの間は、刻々に眺めの変わる美しい混沌の世界だ。⁽¹⁷⁾

相変わらず流麗な印象派風の筆である。だがここでは色彩の単語に代わって、水に関する言葉が頻出する。ハーンが見惚れているのは、何よりも「靄」「霧」の効果だった。

出雲はその名の通り、雲の多い地方である。宍道湖や中海など豊かな水域から常に水蒸気がわきたち、霞と靄、霧となって緑濃い景観をやわらかく包み込む。ハーンは、その風土の特色をよく把握したといふべきだろう。ところが、ハーンが子供時代をすごしたダブリンもまたメキシコ湾気流の影響で降雨と靄が多く、湿润で緑が豊かな風土であった。そして不思議にも、ハーンが生まれたギリシャのレフカダ島も地形が似ている。ハーン自身はレフカダを幼い頃に離れて以来、二度と見ることはなかったが、ハーンの孫の小泉時氏ほか、その地を訪れた人々はみな、海に面し干潟に囲まれたレフカダの町からの景観があまりに宍道湖と中海を臨む松江に似ているのに驚きを表明している。おそらく、これまでハーンが放浪したどの地方とも違って、先の手紙の文にハーン自身述べているように、松江は二重の意味でハーンの潜在記憶に訴えることの強い土地であった。

●「神々の国の首都」

富田屋は市街地の中心に位置していたから、町を探検してまわるにも都合だった。女将とノブの世話を受けながら、ハーンはここを十月下旬ころまで仮の住まいとする。

名文として知られる「神々の国の首都」はそんな松江到着もない頃の、みずみずしい感動にあふれた一日の印象記である。おそらく松江を舞台にした文学作品でハーンのこの文章の右に出るものはいまだにないといえよう。現在、ハーンが言及した松江市内の観光スポットにはそれぞれの似顔絵とハーンの該当する文章を記した標識が立っているし、また「八雲会」という研究者および市民の活発な組織があつて、雑誌発行その他いろいろな行事を市と協力して行っているが、松江市がハーンに感謝と愛着の念を抱くのも、ゆえなしではない。富田屋で迎える朝の目覚めから始まり、古い町並みを散策して土地の風物や人々の生活を見て回り、夕暮れにふたたび宿に戻って夜眠りにつくまでを描いた、この文章はそれほど魅力的といえる。

●朝の音

「神々の国の首都」を名文たらしめ、神々の国に來たハーンの感動を伝えているのは、松江の朝を鋭敏な耳で描く、その有名な冒頭の文章である。

松江の一日で最初に聞こえる物音はゆるやかで大きな脈拍が脈打つように、眠っている人のちょうど耳の下からやって来る。それは物を打ちつける太い、やわらかな、にぶい音で、その規則正しい打ち方と、音を包み込んだような奥深さと、聞こえるというよりむしろ感じられるように枕を伝わって振動がやって来る点で、心臓の鼓動に似ている。それは種を明かせば米搗きの重い杵が米を精白するために搗き込む音である。……（中略）……杵が臼を打つ規則的な、鈍く鳴り響く音こそは日本人の生活から生まれる物音のうち最も哀感を誘う

松江のハーン(二)

ものと私には思われる。実際それはこの大地の脈拍の鼓動そのものである。⁽¹⁸⁾(森亮訳、以下同じ)……

それから川向こうの洞光寺の大きな鐘の音がゴーン、ゴーンと町の空に響き渡り、次いで近所の小さな地藏堂から朝の勤行の時刻を知らせる太鼓の響きが聞こえた。やがて朝一番早い物売りの呼び声が始まる。

「大根やい、蕪^{わぶ}や蕪^{わぶ}」、「もや、やもや、」野菜や薪束の行商たちである。

ハーンが宍道湖の朝焼けにしばし見惚れていると、今度は川岸の方から、柏手を打つ音が一つ、二つ、三つ、四つと聞こえてきた。雨戸をあけて出てきた人々は皆、青い色の小さな手拭を帯にはさみ、大橋川で手と顔を洗い、口をすすぐ。それから彼らは日の昇る方向に顔を向けて柏手を四度打ち、続いて祈る。すると白い橋の方から、ずっと向こうの華奢な小船からも、また別の柏手の音がこだまのようにやって来る。その小船の上では、裸足の漁師たちが立ったまま東にむかって額ずいている。柏手音は激しさを増し、まるであちこちで一斉射撃をしているかのような音だった。人々はお日さま、天照大御神にお祈りをし、中には西を向いて杵築の大社を拜む者もいる。そしてみな神道の昔ながらのお祈りの「祓い給え、清め給え、神忌み給え」を唱えるのだった。……

ハーンの研究書や伝記では必ずといっていいほど引用されるこの長い一節は、まるで映画の幕開けのロングショットのように、明治の町の一日の始まりの情景を鮮やかに伝えてくれる。ハーンは寢床のなかで、異国の町の生活が始まる早朝の物音に起こされる。米搗きの杵の音を耳にして、ハーンは自分が『古事記』を読んで知った「杵築」の地にまさしく来たことをしみじみと実感しただろう。ハーンは西洋的な近代のさまざまな軋轢から解放され、自然と神々の懐深く浸っている思いがした。ここではいにしえの神々の世界の息吹が「大地の脈拍の

鼓動」となつて体に伝わってくる。そして人々はいとも自然に朝日、アマテラスオオミカミに向かつて柏手を打つ。

柏手の音が鳴り止むと、いよいよ一日の営みがはじまつて、働きに出る人々が下駄ばきでカラコロと音をたてながら大橋を渡って行く。「大橋を渡る下駄ばきの響きほど忘れがたいものはない。足速で、楽しくて、音楽的で、大舞踏会の音響にも似ている。朝の日差しを受けた橋の上を無数の足がちらちら動くさまは驚くべき眺めである。それらの足はすべて小さく均整がとれていて、ギリシヤの瓶に描かれた人物の足のように軽やかである。」ハーンはここでも人々の下駄ばきの足をクローズアップし、素足にサンダルの古代ギリシヤの面影に重ねる。やがて日も高く昇つて、学校へ急ぐ子供たちの姿が見えはじめ、船着き場のあたりから小蒸気船の汽笛の音がボー、ボーと聞こえる。

●宵闇の音

朝の情景が一段落した後に続くのは、松江市内の紹介であり、町中へ出たハーンの散策につきあう形で重要な地域に順次スポットがあてられていく。弁天島、大橋から寺町、城山と町全体の構成を述べながら、民家の入口の上に張りつけてある御札に注目し、寺の境内で遊ぶこどもたちの情景や通りかかった巡礼の一団の様子を写しだしては、民俗的説明を加え、そして昔の人柱の哀話や寺に伝わる怪談話も挿入する。

分量的にはこうした市内のルポルタージュが「神々の国の首都」の中心部を占めているものの、この作品を閉じるのは宍道湖の夕暮れの景色、そして黄昏から次第に宵闇に包まれてゆく町に聞こえる、再び様々な音の情景

松江のハーン(二)

である。

宿に戻ったハーンは障子窓を開けて、点々と連なる川向こうの家々の明かりを眺めながら、再び町の声に聞き入る。洞光寺の大きな鐘が闇の中で「仏教ならではの高らかでかつ柔らかい音」を響かせ、それにほろ酔い気分で夜道を歩く人々の歌、そして夜の物売りたちのよく徹る長い呼び声が加わる。

「うーどんやい、そばーやい」、「あめー湯」、「あまいっ、あまいっ」。温かい蕎麦、水飴、甘酒売りが屋台を引いている。「占い判断、待ち人、縁談、失せ物、人相、家相、吉凶の占い」、「河内の国、ひょーたん山、恋の辻占」。流しの易者に辻占売りも町かどに立っているようだ。舞妓芸者の打ち鳴らす小太鼓の音がどこからか賑やかに響いてくる。

すると、東の空に新しい光、峰々の後ろから白い靄をくぐって大きな青ざめた月が昇ってきた。柏手を打つ音がまた聞こえる。道行く人々が長い橋の上から白い月姫の到来を迎えて「お月さん」を礼拝しているのだ。「私はここでひと眠りする。そして崩れかかったどこかの昔むした寺の庭で『影鬼』などをして遊ぶ幼い子供たちの夢でも見よう。」と述べてハーンは筆を置く。²⁰

●音の文学

夜明けとともに遠くから次第に近づいてくる生の息吹のような様々な音が、一日の始まりを告げ、そして夜、最後に再びその同じ音が次第に闇のなかに吸い込まれるように消えいつ一日が終わるさまは、一編の「音」の文学作品としても実に巧みである。

こうした田舎の生活の物音は他の外国人旅行者の耳に入ってこなかったわけではない。例えば、先にも記したイザベラ・バードがハーンより十二年前の一八七八年に東北旅行中、田舎の町で悩ませられたのは、人々の無遠慮な好奇の目のほかに、「日本人のたてる実に雑多な種類の雑音」だったと書き記している。祈りを唱える声は高く、三味線、おしゃべり、風呂でお湯をつかう音、芸者の歌、はなし家のうなり声、それに夜回りの拍子木の音などは「真に悪魔的」で堪えがたいと彼女はこぼす⁽²⁾。

ハーンとバードの耳に入ったのが、ほとんど同じ類の音であるにもかかわらず、両者の受け止め方は対照的である。旅行作家バードの記述は実に表面的で散文的であり、西洋文明を絶対的な尺度として堅持する彼女のいかにもヴィクトリア朝人らしい洗面が浮かぶようだ。

それに対してハーンが「音」を小道具として効果的に使った文章は詩的であるのみならず、神道的心情にあふれた明治の人々の生活を生き生きと浮かび上がらせる。ハーンはアメリカ南部のニューオーリンズにいた頃、『アイテム』紙に「夜明けの声」（一八八一年）という記事をのせたことがあった。それには、ニューオーリンズの朝を賑わす様々なフランス系や黒人系、スペイン系などの物売りの声を通して、民俗色豊かなクレオール⁽³⁾の生活風俗が描かれているから、ハーンにはもともと、その土地特有の音の世界を鋭敏に聞き取る感受性の鋭さがあった。しかし、松江の朝の描写には、はっきりとしたモデルがある。ロティの『お菊さん』のなかの一場面である。

松江のハーソン(三)

●ロティの長崎の朝

ハーソンはもとロティの異国趣味にひかれ、また五感を駆使したその印象主義的手法の文体にもひかれていた。そして一八八七年に発表された『お菊さん』を読んで日本への憧れとイメージを膨らませていた。フランス海軍士官だったロティは一八八五年の七月から九月にかけて長崎に滞在し、お菊という娘と月極めで同棲する。次の一節は、そうしたある日の朝の描写である。

鶏が歌う。隣近所の雨戸が繰られる。或は果物の小商人の異様な叫び声が、私たちの高台の郊外の町を暗がりの内から駆け回っている。そうして朝の光を迎え祝するが如く、蟬がじんじんと更に強く鳴き出す。

わけてもお梅婆さんの長い祈禱の音が、下から二階の床越しに聞こえてくる。夢遊病者の歌のように、単調に、泉の音のように規則正しくゆったりと。……それは高い、急速な、鼻にかかった調子で、いくらでも読み上げられる。それから時々、退屈した神々がもう聴いていなくなる頃になると、吟誦を続けながら、非常に干からびた手で柏手を打ち鳴らしたり、……拍子木みたいなもので激しく音を立てたりする。それは絶え間なく矢の射られているように続く祈禱である。決して尽きることがない。そして震え声で小止みなく歌われている。年取った牝山羊の混迷した鳴き声のように……

『手と足を洗い清めた後で、大いなる神、アマ・テラス・オオミ・カミに祈願します。その次には先祖たちの霊に祈願します。空気と海の神々にも……等々(中略)……』

『私はお願いたします……どうぞ私の汚れを真白く洗い清めて下さい……金持ちになれるようにお恵みを

垂れて下さい……等々……（中略）……」

それを聞いていると随分不可思議である。ついには人間の歌う声とは受け取れなくなる。それは、例えば魔法の呪文の巻物が、尽きることのない軸から解けはぐれて空中へ飛び立ち逃げて行くようである。その珍しさとまたその呪文の執拗さによってまだ眠気のさらぬ私の頭の中へ一種の宗教的印象が生ぜさせられるようになる。

そうして私は毎日この声で目を覚ます。夏の朝の細やかな清明の中を下から起こつてくる神道のこの祈禱の
声で。⁽²²⁾

物売りの声、日の出、祈禱の文句、同じく射撃にたとえられる柏手の連続音。ほとんど同じ道具だての同じ場面の記述といえる。だが松江と長崎、二つの朝の何という印象の違いだろう。そしてその違いは、祈りと柏手の形容のしかたにある。ロティはたゆみなく続く祈禱の声と柏手の音にながしか異教の神秘性を感じとりながらも、「神々さえ退屈しているだろう」と思う。「干からびた手で柏手を打ち」「年取った牝山羊の混迷した鳴き声」といった形容には、頹廢的でなげやりなロティの日本を見る目の冷たさが表れており、また、全部引用はしなかったが、くどくどと続けられる祈禱の長い文句は、いかにも御利益信仰的でいかがわしさを漂わせている。

実際に松江で暮らしてみても、ハーンの評価は変化した。ハーンの耳には、朝の柏手の音も、美しく自然に響いたからである。ハーンはチェンバレンに宛てた手紙に、「私には一時、ロティが自然の眩く燃えあがる魂の奥深くを覗きみた人のように思われました……だが、その色彩と光が色褪せていくと、感覚を鈍化され

た……病的で、鼻持ちならぬ近代的フランス人になってしまった」(一八九三年二月)と述べている。ハーンの自信は、ゆきずりの旅行者ではない、実際に日本の民衆とともに暮らしているというフィールド・ワーカーの自覚にあった。そしてハーンとロティ、それぞれの朝の祈禱と柏手の描写の差は、日本人の日常における宗教的な心性によせる共感のあるかないかの差であつた。

ハーンの「神々の国の首都」は出雲の紀行文の最初の作品ということで、かなり構成が凝っている。朝夕の音の情景の間に、一幅の絵に描いたような日の出と日没の光景を入れて、中心部の紀行文風のスケッチをはさむ。そして中心部のスケッチには随所に民俗学的観察や土地にまつわる伝説を織り込む。まるで、それまでのハーンが熟練してきた、視覚と聴覚によるエキゾチスムの手法を高度に完成させ、なおかつ今後の課題としていた民俗学的考察を織り込むという、ハーンの意気込みのほどを感じさせる野心的な構成になっている。

ハーンが「神々の国の首都」冒頭の松江の朝を書いたとき、充分にロティの文章を意識していただろうと思われる。そして意識的に同じ構図同じ素材で、全く違う自分の感じた日本の町の朝を描いてみせた。『お菊さん』の読者にはその意図がすぐわかっただろう。ハーンは後に日本の怪談の再話作家として名をはせるようになるが、ハーンが換骨脱胎したのは、日本の民話だけでなかった。ハーン以前に記述された様々な日本論、日本のイメージも、そのキーモチーフを使いながら、すっかり異なるものに変えていくのだった。この朝の情景がそうだし、また後述する日本文化の「小ささ」「非個性」「子供」などのイメージもその例である。こうしてハーンの「日本像」がひとつづつ作られていく。

● 柏手の音

ハーンは松江到着早々の九月十四日、中学校教頭西田の紹介状をたずさえ、通訳の真鍋晃を伴って、出雲大社（杵築）に参拝した。「杵築を訪れることは、神道に関する杵築の伝説を聞いて以来のもっとも熱烈な願いであった。」からである。

その日は秋晴れの良い天気で、いつにもまして神々しい靈気の漂う美しい山並みを眺めながら、小蒸気船で宍道湖を渡った。頭の中が古事記の伝説で一杯になっていたせいか、船のエンジンがゴットンゴットンと調子をとって響く音までが、何か神の名前を繰り返す神楽ばやしの音のように聞こえた。「コトシロヌシノカミ、オオクニヌシノカミ、……」

宿の「因幡屋」に到着すると、夕食後、ハーンはさっそく大社に出かけてみる。月もなく、荘厳な暗闇のなか広大な参道がぼんやりと浮かび上がり、鬱蒼たる大樹が遙かに続いていた。そして深い夜の闇を、参詣者の提灯のあかりがホタルの群れのようにゆらゆら動き、大勢の人の水を叩くような柏手の音が聞こえてきた。

翌日の明け方、松江で同じように、耳をつけた木枕を揺する重い、規則正しい、ドスンドスンという米搗きの杵の音に目が覚め、あらためて「杵築」の土地にきた感慨に耽っていると、大社の宮司、千家尊紀から使者が迎えに来てくれた。正式の昇殿参拝が許されたのだった。

巨大な鳥居を次々とくぐり、日の光のもとで見る参道と樹木の壮観にハーンは驚きを新たにした。境内からは潮騒のような重々しい響きが聞こえ、ハーンが進むにしたがってその音は段々強まった。それは、いっせいに打ちならす柏手の音だった。本殿では斎服をつけた数人の神官に出迎えられた。これまでも杵築にきた西洋人は何

松江のハーン(二)

人かいたが、昇殿するのはハーンが初めてだった。神官たちはいずれも背が高く、金の織紋のある美しい紫色の袍を着ていた。その神厳な姿は、出雲と古代ギリシャの神々の世界を重ねあわせていたハーンの目には、まるで古代ギリシャの神僧かアッシリアの占星師のように映る。そしてここでハーンは第八十一代の国造であり宮司の千家尊紀に面会する。ハーンは「不思議な形に髪を結び、白装束に身を包み、古代ギリシャの祭司のように畳に端然として座している、威厳を漂わせた美しい髭の人物。……日の神の末裔である」⁽²⁵⁾この人物にも強い感銘を受ける。

ハーンは大社の、また国造の歴史について話を聞き、種々の宝物を拝観し、優雅な巫女の舞を見せてもらった。千家邸で饗応をうけて後、稲佐の浜に案内され、国譲りの伝説も聞いた。松江へと戻る道をたどりながら、感激さめやらぬハーンの脳裏には、宮司の威厳のある姿が去来し、耳には「滝つ瀬の碎けるような、あの柏手の打ち鳴らす音」が聞こえていた。ハーンにとって、「初めての真に大いなる日本体験」(チェンバレン宛て手紙)だった。

この時の参拝の記録が、約一年後、一八九一年の十二月に『アトランティック・マンスリー』に掲載され、後に『知られぬ日本の面影』に収められた「杵築」である。その参拝記をハーンは次のように結ぶ。

「私にとって杵築を見たということは、ただ見事な社殿を拝観したということにとどまらず、それ以上の遥かに大きな意義があった。杵築を見るということは、……今なお脈打つ神道の、生命の鼓動にじかに触れることなのである。⁽²⁶⁾……」

ハーンは、松江の人々が朝を迎える様子を見て、また杵築に参拝する人々の波を見て、日本人の生活文化を支

える、素材で自然だが確たる地下水脈のような宗教性を実感した。柏手の音の響きはハーンにとって、その象徴とも思えたのだった。

杵築訪問から帰ってまもなくの九月二十七日、ハーンは招かれて県知事の籠手田安定の邸宅を西田千太郎ともに訪れた。知事とはすでに、九月二日、初めて島根県尋常中学校に出向したときに挨拶を交わし、心通じ合うものを感じていた。今日の招待では、貴重な古美術品の他、たまたま虫干しのためにだしてあった雛人形も見せてもらい、茶の湯の饗応を受け、剣術の演技を鑑賞した。令嬢のよし子が松江婦人会を呼んで催していた宴にも列なり、よし子の琴の演奏を聞き、舞妓の踊りをみて大いに喜んだという。

その翌々日の二十九日には、今度は中学校校長の斎藤熊太郎宅に招かれた。たまたま中秋の名月が美しい晩で、清楽などの合奏があった。ここでもハーンは上機嫌で酒を汲み交わし、列席者の詩歌高吟にこたえてハーンも英国とフランスの二か国の歌を歌った。

真鍋晃はすでに東京へ戻っていた。

一カ月はまたたく間に過ぎていった。

(続く)

註

(1) ラフカディオ・ハーン著作集第十四巻、恒文社、一九八三年、四〇九頁。

(2) 小泉八雲作品集一、―日本の印象―、森亮訳、恒文社、一九七七年、三八頁。

松江のハーン(二)

松江のハーン(二)

- (3) 同右、三八頁。
- (4) 同右、四二頁。
- (5) 同右、四六頁。
- (6) 同右、四七頁。
- (7) 同右、四八頁。
- (8) イザベラ・バード『日本奥地紀行』高梨健吉訳、平凡社東洋文庫、一九七三年。例えば一六八頁。
- (9) 前掲書、四二頁。
- (10) 前掲書、一二三頁。
- (11) 前掲書、四三頁。
- (13) 同右、五一頁。
- (14) 小泉節子「思い出の記」、田部隆次、『小泉八雲』所収、北星堂書房、昭和二十六年、一五〇頁。
- (15) 同右、九九頁。
- (16) 前掲書、八七頁。
- (17) 同右、六〇頁。
- (18) 同右、五八頁。
- (19) 同右、六五頁。
- (20) 同右、九三頁。
- (21) 前掲書、四七〜四八頁。
- (22) ビエール・ロティ『お菊さん』野上豊一郎訳、岩波文庫、一九二九年、一〇一〜一〇四頁。

(23) 前掲書、五三四頁。

(24) 小泉八雲全集『知られぬ日本の面影』(上)、恒文社、二三六頁。

(25) 同右、二五七頁。

(26) 同右、二七九頁。